

初年次教育における 学部生リーダー TA および TA の役割 —APU における多文化協働ワークショップの取り組み—

秦 喜美恵

立命館アジア太平洋大学

【スライド1,2】まず、APUの初年次教育の概要、次に多文化キャンパスを活かした国内学生、国際学生の初年次教育の学びのコミュニティと、全学登録必須である「多文化協働ワークショップ」の内容を紹介しながら、先程山口先生からはメンターの話がありましたが、こちらでは学部生のリーダー TA (LTA) と TA がどのようにサポートしてチーム作りの土台となる事前研修に臨んでいるのかという話をしていきたいと思います。

【スライド3】5月1日現在、一応全学で国内学生と国際学生の比率が、大体50:50を開学当初から目指してきました。多文化環境のキャンパスになっています。全学では86か国、1回生でいきますと52か国の国・地域からなっていて、大体1,300弱の1回生を今、初年次教育で混ぜながら協働しているということになります。

【スライド4】大学での初年次教育といえば、もうみなさんも取り掛かれて10年ほど経っていると思いますが、本学では大体3つの柱で動かしていて、1つは大学生活への適応、それから2つ目に基礎的なアカデミックスキルの習得、そしてもう1つは態度ですね、好奇心や積極性を持ってリーダーシップを発揮できるようになる態度形成を目指す、この3つ目が本学の特徴である、APUの多文化環境を最大に活かせるようになるための異文化理解への動機付けですが、これら3つの柱で運営しています。今日はこの多文化協働の話を中心にお話ししたいと思います。

【スライド5】これら3つの柱に含まれる4つの正課科目のうち、全体でTAをどのくらい使っているかということ、基礎的なアカデミックスキルでは大体50名で国際学生と日本人学生合わせて100名を使っており、そして、「ピアリーダートレーニング入門」では16人、「田舎に泊まろう」のような、日本人は韓国に、国際学生は九州のあちこちに自力で行くという科目で13名、そして大量に、ここが1,300人を全部で動かしているところなんですけれども、リーダー TA が7クラス展開で4人ずつで28名、TA 達が112名、全140名、トータルで初年次で、延べ数ですけれども、使っている TA は300人近くということになります。

今日お話の中心になるのは、この移行教育の中の、特別に異文化理解への動機付けということで「多文化協働ワークショップ」のお話を中心に、まずどんな内容を展開しているかをご理解いただいた上で、それを TA たちがどうサポートをして、研修をやっているのかについて簡単に述べていきたいと思います。

初年次生のコミュニティは、国際、国内学生混同でミックスグループにして、その一番

近くにいるのが、学部生の TA チームが 112 名いまして、それを supervise していくのが、先輩格のリーダー TA、その外側に教員のチームが 14 名でかかわって、そして全体を、アカデミックオフィスや色々なオフィスが連携してくれているということになります。後で研修の話をしますが、必ず事前研修では協同学習の考え方と進め方を導入し、教員の方でも必ず FD・SD で、SD の方でも一緒に協同学習の方の学びを深めて参りました。ここにいらっしゃる安永先生には 4 年間に渡って、TA 研修や LTA 研修の協同学習 3 時間ずつをやって頂きましたし、関田先生にも SD 研修を実施して頂きました。

毎週、コミュニケーションを充実させるために、TA, LTA, 教員は常に連絡を取り合っているということになります。【スライド 6】その中の「多文化協働ワークショップ」というのは、異文化協働をやっていくための最初の体験学習ということで、一応目標を 3 つに、異文化コミュニケーション力、チームワーク力、問題解決力というのを、プロジェクトを作りながら学んでいこう、身に付けていこうということになります。

【スライド 7】授業の構成は 30 分大講義で授業をして、その後の 60 分を小講義で、ペア TA が演習を回していくということになります。なので、TA は資料配布などの補助だけではなく、クラス運営まで担当しているということです。クラス運営では、教員の方で全部で 14 週分の詳細な教案を作っておりまして、それに基づいて授業をやっていくということになります。組み合わせは【スライド 8】日本語基準と英語基準が混ざって 24, 5 名で 8 クラスになり、その 1 クラスの中に ABCD という各 6 人ずつのグループになり、国際学生が 3 人、日本人が 3 人という半分半分ですけど、こういう $4 \times 8 = 32$ の小クラスで運営していくという形になります。【スライド 9】で、何をやるかという、結局やるタスクというか課題を通して、それに取り組むことを通して、先程の異文化協働やチームワーク力や異文化理解というものを、体験しながら乗り越えていくというプロセスを体験します。

APU では 8 つの大事な力を掲げていまして、この中の 1 つを選んで自分たちでこれを学んでもらうためのセッションを実施してもらおうということで、企画草案を作って実際に実施をします。セッションの参加者は 1 年生の他のクラスの学生たちということになります。【スライド 10】ここに特定の能力を上げるために体験型セッションを作る。60 分でアイスブレイク、レクチャー、ロールプレイやゲーム、そして振り返りという構成でセッションを実施します。

大事なことは 2 回実施するという事です。1 回目は、手際も悪くうまく運営できないんですけども、そこを改善してチーム力を上げて 2 回目によりうまく実施して達成感を味わうようになっていきます。さらに、他のチームのセッションにも 2 つ出なければならぬので、参加者の立場に立って分かることが、2 回目に全部集約されていくという、ちょっと欲張りな仕掛けになっています。ざっと見ていきますと、【スライド 11】授業の最初の 3 回はグループプロセスを、つまり、グループの関係性を良くするために、いろいろな体験ワークをこちらでやって、TA がコンダクトしていきます。そして 4 週目からが、いよいよコンテンツを作っていくことになります。つまり、最初の 3 週で協同学習の土台作りをして、それを維持しつつ、コンテンツを作っていくという形になっています。【スライド 12】4 週目からは授業外でのグループワークの課題もけっこう増えてきて、授業の外でもチームメンバーと会って関係性の構築、あるいは問題が出たところはそれを解決してい

くという体験を通して活動していくということになります。【スライド13】この写真は第4週のアイデア出しですね。どんなワークにするのかというアイデア出しをしています。大講義と小クラス運営からなり、大講義は毎回あるのではなくて、適宜、必要に応じて教員がレクチャーをして、後は全部TAが運営するの任せていきます。けっこう出席点が高いです。この点数は毎年ちょっとずつ変わったりします。そして、最後のプレゼンテーションのところで、8つの小クラスから選ばれた8グループが、最後に大教室で全員の前でプレゼンテーションをして1位を決める、ということをやります。ここでも他者の上手な、あるいは良い工夫を見て、他者からまた学ぶという構造になっています。自分たちだけで学ぶのではなくて、終わった時点ではいろんな工夫を学ぶことができるということです。

こういう形で目標を掲げながら多文化協働の体験をしていくわけですが、これはつまり簡単にいうと、国際学生と日本人学生を混ぜて、そして必ずぶつかるわけですが、ぶつかったところで試行錯誤をして、乗り越えられない人もいますけども、乗り越えて、そして、課題達成するという形でやってます。乗り越えられなのを私たちは大歓迎しています。乗り越えられないということを経験としての価値という風に考えて次に繋げるようにしていきます。この流れの中で、必ずTA、LTA、教員による介入及び支援があって、セーフティネットというか、誰にでも相談できるようになっているわけです。【スライド14】そのTAですが、一般的にいうとTAは一回生の視点から活動を考えたり、目線が同じなのでいい関係が作れるという、先程の山口先生のメンターの構図と同じなんですけど、スムーズに大学に適応できるようにというのが大元にあると思います。

【スライド15】初年次教育のTAの役割というのは、まず「カッコいいな」「あんな先輩になりたいな」というロールモデルとしてのTA。で、もう一つは学び。自分で、言われたことを受け身ではなくて、自立のための支援を心がけるということです。その対応のポイントとしては、きめ細やかな配慮のある対話が行われる。教員だったらこうはいきませんよね。1対100だったらもうとにかくコンタクトだけです。TAは本当に丁寧に対話してくれますし、それから適宜フィードバックしてくれることによって、相手に気付かせることができる。教えるのではなくて、考えさせるようなフィードバックをする。一年生の背中を押し、モチベーションを維持させる。ということで、先程も研修が必要なのだという事を山口先生がおっしゃっていましたが、まさにその通りで、グループ活動への介入及び支援もしていくわけですから、かなり授業の前の研修というものが大事になって参ります。【スライド16】こちらの飛田(2014)の論文によりますと、異質性の高い集団では、まさにこの「多文化協働ワークショップ」でのグループのことですが、潜在的には問題解決のパフォーマンスが非常に高い能力を示す一方で、課題環境への適応、タスクをやるということと、人間関係を作っていくという両方に負荷がかかるので、なかなか困難さが増す、コミュニケーションが上手くいかない、共通理解がちゃんと取れないということが言われています。つまり、グループは安心安全な場所ではないという場所としてスタートするわけです。【スライド17】そしてそのことへの対応として、グループへの介入や訓練がなされれば、問題解決パフォーマンスが上がるのだと言われています。そこで出てくるのが、まさにグループ活動を支援していくTAたちのチーム力である、という風に構造的には説明できると思います。

【スライド18】また、先程の図にもありましたけれども、協同性を育むということで、一番大事なのはこの事前研修ですね。事前研修では、授業で何をするかというだけではなくて、介入のスキルアップや自分たち TA のチームビルディングも行っていきます。

【スライド19】この秋は、もう帰ったらすぐ、9月12～14日は合宿、2泊3日のリーダー TA 研修があり、その翌々週には日帰りの TA 研修が2日あります。TA 研修は22セッションあります。授業の内容を理解しつつ、TA, LTA の仕事をこなしていく、そして授業運営も作っていくのが LTA の仕事です。【スライド20】そういう循環型の TA, LTA を育てていくということで、学内では正課と課外にまたがるピア・リーダー育成のスキームをこのように掲げていますので、これをまた改善していければと思います。【スライド21(参考文献)】以上です。ありがとうございました。

Shape your world
APU

初年次教育学会 第10回大会
大会企画シンポジウム

「初年次教育における学部生リーダーTAおよびTAの役割: APUにおける多文化協働ワークショップの取り組み」

2017年9月6日(水)
於: 中部大学春日井キャンパス

立命館アジア太平洋大学
教育開発・学修支援センター 秦 喜美恵

1

Shape your world
APU

内容

- ▶ 初年次教育の概要
- ▶ 「多文化協働ワークショップ」の概要
- ▶ リーダーTAおよびTAの仕事と役割

2

Shape your world
APU

APUの学生数

□ 2017年5月1日現在

- ▶ 国内学生 2893名
- ▶ 国際学生 2669名(86カ国・地域)

3

Shape your world
APU

初年次教育の概要

目的	大学生活への適応	大学生活成功リテラシーの獲得	異文化理解への動機付け
1 高校からの円滑な移行と大学生活への適応	新入生オリエンテーション ・入学前教育プログラム(キャンパス訪問デー、「APUノート」課題、英語・基礎力アップ講座、出張講義) ・国際学生寮におけるコミュニティづくり ・保護者向けプログラム(親子で考える留学、キャンパスツアー)	「スタディスキル・アカデミックライティング(旧ワークショップI)」(登録必修科目) 「ピアリーダートレーニング入門(旧APU入門)」(選択科目) アカデミックアドバイザー 学習サポート(基礎学力養成講座、言語自主学習センター、ライティングセンター)	「多文化協働ワークショップ(旧新入生ワークショップII)」(登録必修科目) 「FIRST - Freshman Intercultural Relations Study Trip」(選択科目) 国際学生寮における異文化交流プログラム
2 大学基本理念・歴史の理解とアイデンティティ形成			
3 他者との関係構築・学びのコミュニティ形成			
4 異文化理解力と異なる文化・価値観への寛容性			
5 将来の進路目標設定と高い学習意欲の形成			
6 他者と協調・協働する力の形成			
7 大学における学修技法の修得			
8 主体的・能動的な学修スタイルへの「学びの転換」			

4

Shape your world
APU

初年次科目TAの配置

	スタディスキル・アカデミックライティング(登録必修科目)	多文化協働ワークショップ(登録必修科目)	ピアリーダートレーニング入門(選択科目)	FIRST(選択科目)
授業の目的	大学で必要不可欠な学習技法・学習態度の獲得	APUで必要不可欠な異文化間協働・協働の体験学習	大学生活全般への適応、学習意欲・目的意識の向上、大学の理念・歴史の理解	異文化に対する興味・関心の醸成、海外学習への導入
授業の方法	・言語基準別 ・教員による講義とTAによる演習の組み合わせ ・特定のテーマについて少人数グループで学習し、個人レポートを執筆・口頭発表	・教員による言語基準別の講義とTAによる言語基準混合の小教室演習の組み合わせ ・言語基準混合の少人数グループによるプロジェクトの企画・実行およびその成果についてのプレゼンテーション	・言語基準別に実施 ・大学生活に関連する様々なテーマでディスカッションし、話し合った内容をクラス全体でシェア ・セメスター終盤は言語基準混合になり多文化協働学習およびプレゼンテーション	・国内学生は韓国(春セメ)、国際学生は九州(秋セメ)で3泊4日の実習 ・事前授業で言語学習と調査準備、実習で少人数グループによる異文化オリエンテーションと調査、事後授業で実習の振り返りと調査結果のプレゼンテーション
1クラスあたりの受講生数	最大60名(12名×5グループ)	約200名(日本語基準約110名、英語基準約90名)(25名×8グループ)	48名(6名×8グループ)	・韓国プログラム: 78名(国内学生・九州プログラム: 48名(国際学生))
1クラスあたりのTA数	5名	・リーダーTA: 4名(日本語基準2名、英語基準2名) ・TA: 14名(日本語基準8名、英語基準8名)×7クラス合計112名	8名	・韓国プログラム: 約13名(韓国入学生) ・九州プログラム: 8名(日本人学生・国際学生)
TAの主な業務	小教室演習の運営、グループワークの補助、レポート・プレゼンに対するアドバイス・フィードバック、必要に応じて授業外でサポート、出欠確認、資料配布、課題回収・返却	グループワークのファシリテーション、個別アドバイス・フィードバック、出欠確認、資料配布、課題回収・返却	グループワークの補助、言語学習・調査準備の補助 ・実習中は手伝わない	

5

Shape your world
APU

多文化協働ワークショップの概要

授業の目的

チームワーク力
異文化間コミュニケーション力
問題発見・解決力
異文化間協働・協働

6

多文化協働ワークショップの概要

Shape your world
APU

授業の方法

講義(約30分)

- ・ 教員が担当
- ・ 大教室
- ・ 言語基準別々

+

小教室演習(約60分)

- ・ TAペア担当
- ・ 小教室
- ・ 言語基準混合

7

多文化協働ワークショップの概要

Shape your world
APU

クラス構成

講義@大教室

日本語基準	英語基準
-------	------

演習@小教室

1	2	3	4	5	6	7	8
---	---	---	---	---	---	---	---

グループ

A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

8

グループプロジェクト

Shape your world
APU

ミッション: 8つの中からテーマをひとつ選び、APU生を対象とする体験型セッションを企画(セッションプランを作成)し実施する

- ① 自己発見/Self-Discovery
- ② 積極性・挑戦意欲/Challenging Spirit
- ③ 柔軟性・適応性/Flexibility
- ④ 共感/Empathy
- ⑤ チームワーク/Teamwork
- ⑥ 創造性・革新性/Creativity/Innovation
- ⑦ 感謝心/Sense of Appreciation
- ⑧ 多様性理解/Appreciation of Diversity

9

体験型セッション

Shape your world
APU

目的	充実したAPUライフを送るために必要と思われる特定の能力の獲得あるいは向上
手法	参加者が実際に活発に参加・体験できるようなアクティビティ(ディスカッション、ゲーム、ロールプレイ、ミニレクチャー、リフレクションなど)
1セッションの長さ	60~75分
実施場所	学内の教室
実施期間 (2015年度事例)	第1回目: 12月9日および12月16日 第2回目: 2016年1月10日(日)2-5限 予備日: 2016年1月13日および1月20日
実施回数	2回
備考	受講生は、他のグループ(どのクラスでも構わない)が実施するセッションの中から少なくとも3つ異なるセッションを選んで参加しなければならない。

10

授業スケジュール(資料1参照)

Shape your world
APU

週	内容
1	オリエンテーション & アイスブレイキング
2	チームワーク
3	異文化間コミュニケーション
4	Project Based Learning ↑ 中間振り返り
5	
6	
7	
8	Project Based Learning ↓ PPT作成・ビデオ編集研修
9	
10	
11	Project Based Learning ↓ 1回目セッション実施
12	
13	
14	Project Based Learning ↓ 小クラスプレゼンテーション
	Project Based Learning ↓ 大クラスプレゼンテーション 最終振り返り

11

週	小クラス	授業外①	授業外②
4 (10/28)	ブレインストーミング	グループワーク セッション企画草案を作成し、11/4(水)提出	
5 (11/4)	セッション企画 草案完成	TAがコメントし11/6(金)までにグループに返却	グループワーク TAのコメントに沿ってセッション 企画修正版を作成し、11/11(水)に発表
6 (11/11)	セッション発表 +フィードバック	グループワーク フィードバックをもとにセッション企画最終版を仕上げ、11/18(水)提出	
7 (11/18)	校友による講演	教員による評価ー11/20(金)までに連絡(承認・不承認)	グループワーク 不承認のグループは修正し、11/23(月)までに教員に再提出
クォーター レイク		グループワーク 不承認のグループはさらに修正し、11/30(月)までに教員に再提出	
8 (12/2)	セッション準備	グループワーク セッション実施に向けての準備・練習	
9 (12/9)	セッション実施		

12

第4週:セッションのアイデア出し



13

初年次教育科目への学部生TAの登用の意義

- 1回生の視点から、活動や課題を考えることができる
- 1回生の目線に立つことで、話しやすく、より良い関係を築ける

1回生が、大学での学びや生活にスムーズに適應できるように、支援する

14

初年次教育における先輩TAの役割

- ロールモデルとしてのTA
- 初年次生の自立のための支援
 - ▶ 先輩として共感をもって行う細やかな配慮ある対話
 - ▶ TAからのフィードバックによる受講生の自己理解の促進、および次のステップへの背中押し
- グループ活動への支援および介入

15

異質性の高いグループの課題

- 飛田(2014)によると、
- ▶ 異質性の高い集団は、
 - ⇒ 潜在的にすぐれた問題解決パフォーマンスを示す可能性が高いが、課題環境への適應と対人関係への適應を同時にやることで、
 - ◆ 相互コミュニケーションや共通理解の困難さが増す
 - ❖ 情緒的の魅力や集団凝集性が低減
 - ❖ 対人葛藤が生起する

16

▶ その対応として、

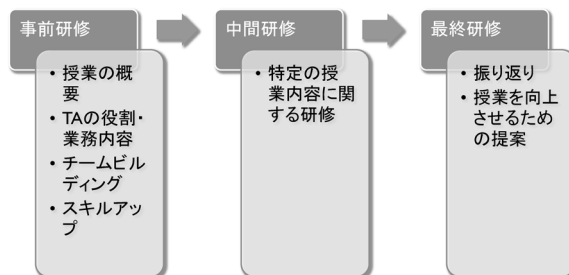
⇒ 介入や訓練がなされれば、異質性の高さを効果的な問題解決パフォーマンスに結びつけることが可能
 ⇒ 相互の共通理解や共通の目標の共有化という集団システムレベルでの過程が重要



TAによるグループ活動への支援および介入

17

学期中のTA研修



18

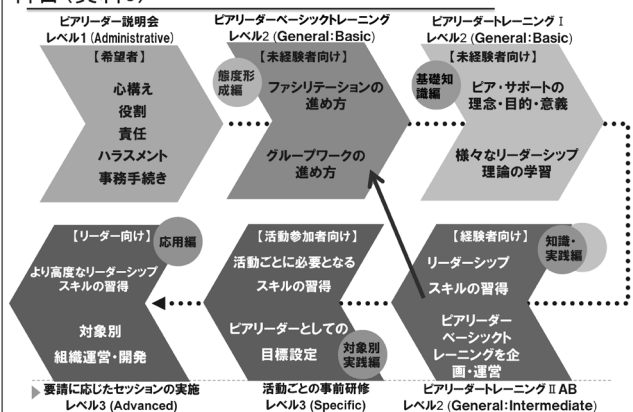
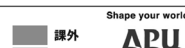
事前研修:2017年度予定



□リーダーTA研修:9月12日(火)~14日(木)(2泊3日)(資料2参照)

□TA研修:9月27日(水)、28日(木)(9:30~18:30日帰り)

育成スキーム:初年次科目とピアリーダー科目(資料3)



19

20

参考文献

- 飛田操 (2014)「成員間の等質性・異質性と集団による問題解決パフォーマンス」『実験社会心理学研究』, Vol.54, No.1, 55-67.
- 平井達也・秦喜美恵 (2017)「すべての新入生に多文化間共修を:立命館アジア太平洋大学の事例」坂本利子・堀江未来・米澤由香子編『多文化間共修:多様な文化背景を持つ大学生の学び合いを支援する』学文社, pp. 179-206.

21

ご清聴有り難うございました!

連絡先: kimishin@apu.ac.jp



22